戦時下での生活

佐賀県三養基郡北茂安町　　青木美恵子

今年に入って、やたらと戦後５０年の記事が目につく。私の場合どうだったのかと、ふと考える。『欲しがりません勝つまでは』の言葉のとおり、世の中はみな通帳か切符制度で、着る物食べる物色々な品物は本当に何もなかった。会社員の父を始め、母兄妹弟と、８人家族が食べて暮らしていくのには、並大抵の事ではなかった。

１反３畝の田圃に畑がわずかばかりあった。その頃の政府の方針はどうなっていたのか、わかりませんけれども、お国のためと、地区で割当があって、少しでも供出しなければならなかった。穀物または甘藷、馬鈴薯と、いも類まで供出の対象になっていた。反当たりの供出のため、田圃が多くある家では、闇で売っておられた。

御多分にもれず私の家では供出すれば、一年中の米麦藷等は無く、配給または闇で買わなければならなかった。

供出のための闇の買物。父が頭をさげて、手に入れた米を夜になって運んでくるのに、私は自転車の後押しにかり出されて行った。今のように外燈もなく、また、あっても燈火管制のため消されていた。本当に闇の買出しである。

途中坂道があり、後押しの仕方が悪くてひっくり返り、父にこっぴどくしかられた。

馬鈴薯の収穫の季節になり供出の割当が来ました。家には供出までするような収穫はありませんでした。

たくさん作っている農家より買って供出しなければなりません。朝から雨が降っていた。

父の実家のおばが「馬鈴薯は掘って用意しているのに、取りもこないようだったら他所へ回す」と言っておこられると、血相を変えて家に来られた。父が供出のため、ある家に頼んでいたのであった。母と私が天秤棒を持って、雨の中頼んであった家に行った。

母は一生懸命頭を下げている。でも二、三日降った雨のため馬鈴薯は掘ってもなかった。

おばの言葉があまりにも賤劣な言葉であったので、家に帰ってから母と二人で手を取りあって泣いたのを良く覚えている。

自分の家で食べるのにも足らないような田畑しかない者にまで、供出させないで良いものをと近所の篤農家をうらんだりもした。

時々物資の配給がある。反物、地下足袋、肥料等。肥料は反当配給でもわかるけれど、仕事着等作る反物、地下足袋は私の家では何回か抜けるためなかなか手に入らなかった。

冬に備えて麦蒔きする季節は、素足で、なるだけモンペをはかないで、尻切襦袢を着て働いていた。手足が冷たくて、ちぎれそうな時もあった。当時１４、５歳時代であった。

その頃より学校では、竹槍訓練とか防火訓練等であまり勉強もしてなかった。

戦時下では学校も行ったり行かなかったりで、学徒動員として軍需工場に行った人もいまし

た。私は少しばかりの田圃があったためか、学徒動員には行かなくてすんだようです。

牛は家では飼っていなかったが、男性は兵隊に行き、老人、女、子供ばかりで私達まで牛の使い方の講習があり、近所の牛を借りて田圃を耕していました。

出征兵士の家には、良く勤労奉仕に出かけた。銃後の守りは私達の手でと、一生懸命に働いた。軍需工場のある町や、大都会では、あちこちで空襲にあっているのに、ラジオでは敵機を何機打ち落としたとか、駆逐艦を沈めたと、よく放送していた。

末端の国民は放送を聞くたびに、勝った勝ったと、苦しい中にも喜んでいた。

硫黄島玉砕、沖縄の上陸とだんだん本国にも、いつ上陸するかもわからないような戦況となりつつあったが、一億総玉砕するまで戦うんだと皆燃えていた。

私達の身近な所でも戦死の公報が入り、ご遺骨を出向えるようになった。

戦後聞いた話では、箱の中は石ころだったとのこと。ご家族のご気持ちはいかばかりだったことだろう。家では戦地には誰も行かなかった。

２才年上の兄は自分の不養生のためとはいえ、寝たり起きたりの病人であった。今では良薬が出来てすぐ直る病気であるのに。

兄たちの年代から上の人々は、志願して軍隊に入っておられた。同世代の兄はどんな気持ちであったろう。今になって考えると、大変悔しかったろうと思います。

その頃は、どこの家にも出征兵士の家と書いた表札がかけてあった。

我が家にはなかった。兄が兵隊検査までには間に合うよう良くなってほしいと、心の中で思っていた。世間様に片身が狭いと思っていたのかもしれない。

戦後間もなく父が亡くなり、後を追うように兄も亡くなった。人生良い事もないまま亡くなった兄に、私は何一つ優しい言葉をかけたことはなかった。私自身がぎすぎすした生活をしていたと思う。

戦後５０年たった今になって、兄も戦時下の犠牲者だったんだなあーと、つくづく感じる。生きている時に「兄ちゃん頑張って」と言える私だったらと、今になって口惜んでいる。

戦況もいよいよ厳しくなり、昼夜となく、頻繁に空襲があり、都会の児童たちは親元を離れて田舎に疎開していた。

我が家には親類の家から疎開の荷物が送られて来た。母は大事なよそ様の財産をネズミにかじられてはいけないと、お座敷の真中に入れた。家の中が狭くなった。

広島、長崎と大変な爆弾（後に原子爆弾ときく）が落ちた頃からか、米軍機からビラが撒かれた。

カタカナで「ニホンコクミンノミナサン」と、いう書き出しで、降伏しなさいというような文章だったような気がする。

大人達は「皆降伏などするものか、降伏したら一人残らず殺される。女、子供は辱めをうけてなぶり殺される」と話しておられた。

それからまもなく隣組で掘った防空壕に、幸いにして一度も入ることもなく、私事１６才で

終戦を迎えた。

私達の町では空襲を受けることもなく、山河は何も変ることもなく無事な姿で残った。

けれど日本はいたる所で廃虚となり、復興するまでは大変だった。

今や戦後５０年、激戦地で犠牲となられた方々、また国内では北から南と、空襲で家を焼かれ、また亡くなられた方々のご冥福を心よりお祈りいたします。

また、これから先不戦平和を願う事を若い世代に伝えていきたいと思います。